

「では、診察をしていきますね」

若い医師が健診票に目を落とす。

さらりと垂れた長めの前髪の奥に、落ち着いた表情が覗いている。

「はい」

わたしは先生と向かい合って、患者用の丸椅子に腰掛けながら返事をする。

転職先から健康診断書の提出を求められ、急遽、近所のクリニックを受診することになった。

あまり下調べせずに選んだので不安もあったけれど、受付からここまでの検査はスムーズでストレスもなく、良い病院を見つけたなと思った。

「体調について、何か気になることはありますか？」

「いえ、特には」

「手足がしびれたり、力が入りにくかったりすることは？」

「ないです」

「分かりました」

先生が健診票にペンを走らせる。

一通りの検査はすでに終わっていて、この診察で最後だった。こぢんまりとした診察室は白を基調としていて清潔感がある。

医師のデスクと患者用の椅子、その奥には薄いカーテンで仕切られた診察用のベッドが見えた。

小さなクリニックで、診察室にいるのは先生とわたしだけだ。

ふたりきである意識すると、なんだか妙に緊張してしまう。

ただの診察なんだから――。

わたしはそう自分に言い聞かせ、緊張を悟られないようにできるだけ平静を装った。

「じゃあ、一応、反射も見ておきますね。足の力を抜いてください」

先生が小さなゴム製のハンマーでわたしの膝の頭を軽く叩いた。

次の瞬間、意思とは関係なく、わたしの足がぴくんと前に跳ねた。

「大丈夫ですね」

先生は何でもないことのように健診票へ視線を戻す。

――この膝の検査、久しぶりにやったな。

わたしがそんなことをぼんやり考えていると、

「では、服をまくってお腹を見せてください」

「あ、はい」

わたしはちよつと照れながらもシャツを胸の下あたりまでめくる。

聴診器があてられ、金属のひやりとした感触に思わず声が出てしまいそうになる。

聴診器はお腹の真ん中から徐々に上に移動していき、めくったシャツに突き当たる。

「もう少し上にあげてもらえますか」

先生は淡々と告げる。

検査のためブラは取っていたので、これ以上シャツをまくしあげると胸が露出してしまふ。

お医者さんの前とはいえ、こんな格好良い人の前で自分から胸をさらけだすなんて……。わたしは羞恥心を覚えるが、診察のために必要なことだ。

シャツをたくしあげ、胸を露出させる。

先生がおっぱいの谷間あたりに聴診器をあてる。

「ひゃんっ♡」

羞恥心のせいかな、先ほどよりも敏感になっていて聴診器の感触に声が出てしまう。

聴診器の冷たさの刺激で乳首がつんと立ってきてしまうのがわかった。

「あ、すみません、変な声を出してしまっ……」

「大丈夫ですよ」

先生は気にした様子なく、聴診器を当て続ける。

わたしはドキドキとしてしまっ……て、心臓の音が聞こえないか心配だった。

「乳首は桜色、健康的な乳房……問題はなさそうですね」

わたしのおっぱいの所感をつぶやいていくので、顔が赤くなってしまう。

先生は聴診器を外すと、次にわたしのおっぱいを手で包み込んだ。

「では、触診していきますね」

「えっ……んっ♡」

先生の細い手がわたしの胸を優しくもみ、先生の手の体温が伝わってくる。

重さを確かめるように乳房の下から持ち上げたり、揉んだりする。

——健康診断って、こんなことまでするの？

不思議に思うけど、そういうえば、健康診断を申し込むときに色んな特別オプションがあった。

せっかくだから色々検査してみようとよく確認せずに申し込んでいたけど、もしかして、これもその一部なのだろうか。

先生は一通り、わたしの胸を揉むとうなずく。

「ハリがあつて弾力もあり問題はなさそうですね」

それで終わりかとおもったけど、先生は次にわたしの乳首をつまんだ。

「んんんっ♡」

突然のことにわたしは喘ぎ声をあげてしまう。

わたしの乳首はピンと張り詰めて敏感になっていた。

先生はつまんだ指の腹でゆっくりと乳首をこねるように動かす。

「感じますか？」

「んっ♡……か、感じません♡」

本当はびんびんに感じていたけれど、恥ずかしくてついうそをついてしまう。

すると、それまで落ち着きはらっていた先生の顔がにわかに曇り、心配そうな顔つきになった。

その心配そうな顔つきに、わたしは不覚にもかわいいなと思ってしまう。

「これはどうですか？」

「んんんんんっ♡」

先生がわたしの乳首をカリカリカリカリと甘くひっかく。

「感じませんか？」

「んあっ♡んひっ♡」

私は感じすぎてしまい、喘ぎ声でまともに返事をする事ができない。

固くなった乳首を指の腹でこねるようにまわす。

わたしがちゃんと返事をしないのでまだ足りないと考えたのか、さらに乳首をなめ、舌で執拗に攻める。

コロコロコロコロ♡

熱い舌が乳首をなめまわす。

それだけでなく、乳首に吸い付き、舌先で乳首の先をなめた。

「んっ……♡♡♡か、感じます♡♡♡」

わたしが何とかそう言うと、ようやく先生は乳首をいじるのをやめ、安心したような表情。